

現地支援チームより（東都協議会第5次被災地支援隊報告）



4月3日：7地区から集まってきた400人が避難している岡田小学校の救護所に派遣されました。看護師は救護所のみでの活動で、被災した方達の生活するスペースにはほとんど入ることが許されていません。避難所は保健師さん達が担当しており、看護師は本当に救護所のみとなっています。5時起床で、7時前には朝礼があり、午前中10～12時は歯科の診療があって補助業務を行い、午後1～4時は内科・外科の診療があり問診業務を受け持っています（診療介助は派遣先のオープン病院というところの看護師が行なっています）。

合間に保健師さんと朝・昼・夕の3回のカンファレンスを行い、体調や病状などをチェックしています。配給のご飯は本当に少なく、昼はジャムパンに水でした。補食は被災した方が食べられていないこともあり、自分たちが食べられる雰囲気ではありません。また24時間の救護所のため、夜も利用しにくる方がいます。
（東都協議会支援対策本部 NEWS より・写真は他避難所から）

立川相互病院で原発事故緊急学習会

4月1日、立川相互病院にて「福島第一原発事故による放射線の影響について」と題しての職員学習会が開催されました。この日は健生会グループの入社式もあり、65人の新入職員を含む約200人の職員が参加しました。

講師は全日本民医連被爆問題委員の向山新先生（ふれあいクリニック所長）。向山先生は、福島・わたり病院の齋藤紀医師の講演資料も紹介しながら「いま福島原発事故で問題になっている放射線量は、広島・長崎の被爆者から見れば低い数値。放射線障害のリスクはあるが、それには対応できる。今は被災者への医療支援・生活支援が大事」と、冷静で科学的な対応を呼びかけました。



【4/2 青年のつどい報告】

4月2日に「大震災現地支援報告と東京都政を考えるつどい」が開かれ、7法人から16人が参加しました。内容は民医連の活動をレポートした「ガイアの夜明け」視聴に始まり、現地支援者6人からの報告、柳原事務局次長から「震災支援の中間まとめと防災都市東京のありかた」講義、最後に小池あきら都知事候補のDVDを視聴しました。

報告者からは、「被災地では職種性を発揮して『医師』として何ができるか大事」「支援物資が病院から先届かないということで、地域訪問に出る時に物資を持っていき提供するなど、支援も日々模索しつつ臨機応変に変化させている」「東京で同規模の災害があった時どうするか、災害時連携モデルなどの構築が必要と感じた」などの感想が語られ、あらためて防災都市東京（小池ビジョン）構築の必要性を感じました。

さらに感想交流では、各自の現場で起こった（東京の）被災状況や、各事業所地域での支援・募金活動など共有されました。「私たちに何ができるのか？」との問いかけや「今回話を聞いて初めて現地支援の全体像がわかった。自分に見えていたのはほんの一部分だった」という感想もありました。